

本書は、私が仕事として手がけた結果であるが、私の心から生まれ出たものでもある。その意味で私は、あなたが想像もできないほどの興奮を覚えると同時に、厳粛な気持ちに包まれている。

本書がテーマとするのは今の子供たちだ。ならば、未来がテーマということでもある。あなたが子供を憂える親、教育を職業とする人、あるいは先見の明のあるビジネスリーダーであろうとなかろうと、本書が送り届けるのはさわやかな一陣の新風、世に知らしめるに値する主張、人々に対する強烈な行動の喚起であることに気づいていただければいい。あなたはこれから本書を通じて、米国はじめ世界各地のますます多くの学校で大きく花開こうとしている新たな動きを目の当たりにする。それは実に興味深い傾向であり、具体的かつ持続可能な成果を生み出しつつある。

最初にお断りしておくが、私がこの潮流を引き起こしたわけではない。意欲的かつ独創的で、思いやり深い教育者たちの活動が広がっていることによるものだ。彼らは教育というものに新たな希望の光を灯すべく、子供を持つ親、市民団体の指導者、企業経営者などと力を合わせて相乗効果を発揮しているのである。

背景を理解していただく意味で、数年前——つい昨日のように感じられるが——の話から入ろうと思う。一九八九年、『7つの習慣』が出版された。副題は「成功には原則があった!」である。この本はビジネス界を中心に、私自身も予想しなかったほどの反響を巻き起こした。そして今日もなお、全世界の企業、政府機関、企業内大学で活用されている。

『7つの習慣』が発売されたのとはほぼ同じ頃、私はチャック・ファーンスワースから声をかけられた。彼は当時、インディアナ州のある進歩的な学区の教育長をしていた。「7つの習慣」は教育に効果を発揮するはずと確信していた彼は、運動の先頭に立つ決意を固め、まず学校の管理者や教師たちを指導した。今日では、五〇万人近くの教育者たちが習慣トレーニングを受けしており、その多くが学校のファシリテーターに認定されている。

「7つの習慣」を学校に導入する場合、それまでは子供よりも大人の訓練が目的とされていた。そこに新たな動きをもたらしたのは一九九八年、私の息子ショーンによる『7つの習慣ティーンズ』が世に出たことだ。息子はカレッジフットボールの一部リーグでクォーターバックをしていた経験から、ティーンの前に立つ機会が多かった。そのため子供たちへの関心を深め、それがのちにティーン版の執筆へとつながっていく。ティーン版は現時点で三〇〇万部以上売

れ、一〇万人余の中高生が習慣を学んでいる。

一九九九年後半、学校への「7つの習慣」の意義深い導入が再び実現する。あれは、私がワシントンDCで講演をしていたときのことだった。小学校の校長をしているというミュリエル・サマーズと名乗る女性から話しかけられた。習慣を子供たちに教えることの可能性について、意見を聞きたいというのだ。シヨーンの本を紹介すると、自分が言っているのはもともと低年齢の、五歳くらいの子供だということだった。「可能だと思いますよ」私はそう答えたあと、実際に試したら結果を教えてほしい、と何気なく付け加えた。

この短い出会いのあと、ミュリエルと彼女の才能豊かなスタッフがどんな事をしたか——それを紹介するのが本書の使命である。それは実に素晴らしいストーリーであり、その動きはその後徐々に広がりを見せ、勢いを得つつある（一部に悪評もあるが）。学年末に目標を達成する生徒の比率が八四%から九七%へと上昇し、廃校寸前の学校が米国トップのマグネットスクールに選ばれた事実がそれを物語っている。彼女たちはどうやってそれを実現させたのだろうか。この学校に限らず、今では数多くの学校が小学生に、それも何と五歳児から「7つの習慣」などのリーダーシップ原則を教え、大きな成果を上げている。独自性溢れる彼らの手法にあなたは驚くことだろう。こうした学校は何も、生徒たちをCEOや世界的な指導者に育てようとしているわけではない。二一世紀をいかに生き、成功を手にするか、その方法を習得させようとする。

しているのだ。あなたは彼らのとった行動の中に、今日の学校の前に山のように立ちほだかるジレンマを解消するための信頼性の高い原則重視の解決策を見出すに違いない。

教育というテーマを採り上げるにあたり、一言確認しておきたい。今日の教育者たちが常に事細かく監視され、近年は報道でもよく槍玉に挙げられていることは私もよく承知している。だが、そういう事は本書の趣旨ではない。私は批判するよりも、良いものを推し進めたいと思っている。近頃はどの学校を訪れても、必ずといっていいほど感服しながらそこをあとにする。自分が良いと信じる事、子供たちの人生に役立つと思う事を実行すべく、多大な犠牲も顧みずに努力しておられる気高い教師たちを目にするからだ。真の英雄たちの行動には目を向けず、教育の悪い面ばかりとやかく言うのは、恩知らずの哀れな行為と言わざるを得ない。

世間には、私のやっている事を私利の追求と見る方もいるかもしれない。一部でそういうとらえ方をされるのは、私としては覚悟の上だ。それも、これから紹介する学校が今の子供たちのために進めている活動の意義を強く信じるからにはかならない。フランクリン・コヴィー氏が、学校、企業、親、地域社会のリーダーたちとの連携の下、予測し難いこれからの時代を生き抜く能力を子供たちに身につけさせる手段の提供をミッションにしているのも、そうした学校が実現しつつある意味深い成功ゆえのことだ。また、シヨーンの新著「7 Habits of Happy Kids」が最近出版されたが、彼の執筆意欲に火をつけたのもそれらの学校の成功だった。本書

とシヨーンの著書はともに、あらゆる国の社会や子供たちの向上を目ざすフランクリン・コヴェー社の活動の中核に位置しているのだ。

本書は多くの方々の努力が結集された結果である。私のパートナーであるボイド・クレイグは、深い洞察力を駆使して今回のチームおよびプロジェクトをリードし、方向付けしてくれた。また、デイビッド・K・ハッチ博士は、情熱と献身、世界クラスの人格と能力でもって調査活動を導いてくれた。私の気持ちを受け止め、それをデータで裏付けし、私がそれを文章に起こすのを手助けしてくれた。その彼らを効果的にサポートしてくれたのは、フランクリン・コヴェー社教育ソリューションチーム、とりわけサラ・ノーブル、コニー・スペンサー、アaron・アシユビー、シヨーン・コヴィー、ジュディー・ヤウク、シヨーン・ムーン、ステファニー・カルトンらだ。ナンシー・ムーア博士、ジェーン・ナイト博士、ロニー・ムーアなど豊富な実績を有するコンサルタントたち、またクレイグ・ペース、デイーン・コリンウッドらには本書の予備調査を担当してもらった。そのほか、ビクトリア・マロットらには管理面でお力添えをいただいた。私のオフィスチームのジュリー・ギルマン、チエルシー・ジョン、ダーラ・サランには私の作業全般を終始支えてもらった。いや、それ以上に、一〇〇人を超える教師、教育長、校長、親、教授、教育委員の方々が、広範囲な情報や本書の厳しいチェックを自発的に引き受けてくださったことも忘れるわけにはいかない。彼らの実践的で切磋琢磨された意見が一

ページ一ページに重みを持たせてくれたのだ。ご協力いただいたすべての方々に対し、心より謝意を表する次第である。

本書を読む際は、まずは内容を大雑把につかむ意味で、写真とその説明文を中心に全体にざっと目を通してみるとよいだろう。

いろいろな資料を閲覧し、本書のページをめくっていくうちに、私自身の並々ならぬ思い入れと、その背後にある、今の子供たちが秘める能力に対する強い確信を感じていただけただけら幸いである。私は一人の祖父として、孫たち、彼らの子供たち、そしてさらに彼らの子供の子供たちと共に本書が可能性をもたらすことができたら嬉しく思う。その可能性が大きいことを信じてるとともに、この上なく素晴らしいものであることを願わずにはいられない。また、一人の世界市民として、すべての子供たちの成長と健康、そして幸せに常に関心を抱いている。子供たちは未来の、すなわち私たちの将来の社会の主役であり、希望なのだ。その未来が安泰であることを私は祈ってやまない。最後に一人の企業幹部として、今の子供たちの目に、生気溢れる将来の労働力、間違いなく前途に横たわる課題を克服する能力を備えた未来のリーダーとしての姿を見通すことができたらと思う。

本書がその翼を広げて高く舞い上がり、世界中の今の子供たち、さらにはこれから生まれる子供たちの人生に意義深い変化をもたらすこと、それが私の切なる願いなのである。